

大学生の一般的授業選択態度と成績との関連(1)¹ 一般的授業選択態度のタイプ分け

牧 野 幸 志

Relation between types of student general attitudes on selecting classes and academic grades (1). A classification of types of general attitudes on selecting classes Koshi Makino

Abstract

The purposes of present study were to classify types of undergraduate student's attitudes on selecting classes and investigate relation between those types and academic grades. Undergraduate students ($N=114$) took part in this survey by completing a questionnaire. The main results were as follows: (1) Three factors were found about student's attitudes on selecting classes, that is, "Easiness of getting credits", "Excellence in contents of class", "Utility of the class". (2) The students were classified into 3 types based on attitudes on selecting classes by cluster analysis. These were students who prefer classes in which it is easy to get credits, students who prefer classes with good and useful contents, and students who have no significant orientations. (3) Among 3 types, there were no difference in examination score and academic grades. Finally, it was suggested that general student's attitudes on selecting classes might influence the active attitude in class, after all, those attitudes cause good grades.

Key words : general attitudes on selecting classes 一般的授業選択態度, university students 大学生, academic grades 成績.

問 題

大学進学率が高まる中、日本においては大学教育が大衆化しており、その進学理由や勉学に対する態度も変化しつつある。進学理由については、勉学を修めるためという本来の目的を持って進学して来ている学生もいる一方で、「遊ぶために」、「アルバイトをするために」、「友達を作るために」、「なんとなく」などの理由で大学に進学する学生も存在する(井上, 1993; 刈谷, 1995)。また、大学における学生の学習態度も問題となっている。例えば、授業中の私語、居眠り、携帯電話の使用など学生の授業中の態度が問題視

¹ 本研究は、平成13年度高松大学教育研究経費配分による共通研究費の援助のもとに行われたものである。

されている（水野，1998，1999）。さらには，大学生の学習意欲の低下，学力低下などのより深刻な問題も指摘されている（井上，1993；豊田，1999）。

このように，現在の大学生は，進学理由の面でも学習態度の面でも多様化している。これにともない，大学生が授業選択の際に何を基準にするのか，どのような授業の情報を重視するのかという授業選択態度にもさまざまなタイプがあることが指摘されている（松田・三宅・谷村・小嶋，1999；三宅，1999）。例えば，授業内容を重視して選択科目を選ぶ学生もいれば，単純に単位のとりやすい科目だけを選ぶ学生もいる。このような授業選択態度のタイプが明らかになれば，現在，多くの大学で行なわれている学生による授業評価（例えば，牧野，2001a，2001b）においても，学生の授業選択態度による授業評価の差異の検討が可能になるだろう。三宅（1999）は，国立大学の学生を対象にし，授業選択態度の実態をクラスター分析によりタイプ分けを行なっている。その結果，大学生の授業選択態度に5つのタイプを見いだしている。第1は，積極的な授業の選択基準を持たないタイプ，第2は，多人数のクラスを嫌い，個性を活かした主体的な学習ができる授業を期待するタイプであった。第3は，教官の人柄や授業内容を重視するタイプ，第4は，全体的にどのような授業も選択しようという傾向が強い積極的なタイプ，そして，第5は単位取得への労力を惜しみ，単位の取りやすさだけを重視するタイプである。さらに，三宅（1999）は，授業選択態度のタイプにより成績が異なるかを検討した。その結果，積極的な授業の選択基準を持たないタイプと単位の取りやすさだけを重視するタイプにおいては，優を取得する学生数が他の成績（良，可，不可）を取得する学生よりも少なかった。また，教官の人柄や授業内容を重視するタイプでは，優を取得する学生数が他の成績（良，可，不可）を取得する学生よりも多かった。

しかしながら，三宅（1999）においてはいくつかの問題点がみられた。1つは，対象科目の特異性である。三宅（1999）では高等学校教諭1種免許状取得のための必修科目を対象科目とした。調査実施においては「あなたがある選択科目をとるかとらないかを決めるときに」と教示しているが，調査対象者は3年生以上であり，専門科目ということもあり，実際には選択の幅の少ない専門科目を選ぶ際を想起した可能性がある。第2に，成績評価の基準の不明確さである。三宅（1999）での対象科目は1種類であったが，学生は所属学部学科により4つのクラスに分かれていた。授業は同一の教科書を用いていたが，担当教官は4つのクラスとも異なっていた。学生の成績は，A，B，C，D（優，良，可，不可）の4段階で担当教官がつけたものが指標として用いられていたが，成績の判断材料

（出席，レポート，小テスト，期末テストなど）は教官により異なっていた。つまり，使用された成績の判断基準が異なっていたのである。これら判断基準の異なる成績評価を用いることには問題が残る。

そこで，本研究では，より一般的な授業選択態度を検討するために，調査対象科目を選択の自由の幅が大きい教養科目とする。また，成績の公正さを考慮するため，同一人物が同一教科書を用いて行なった2つの授業を対象とする。したがって，試験の内容に多少の違いはあるものの採点の判断基準，成績評価の判断基準は同一である。このような改善を加えることで，一般的な授業選択態度と成績との関連を検討することが可能となるであろう。なお，本研究でいう一般的授業選択的態度とは，「学生が，普段，授業を選択する際にどのようなことを重要と考えているか」という一般的な態度であり，特定の科目を想定した選択基準ではない。

本研究の目的は，三宅（1999）にいくつかの改善を加えて，大学生が選択科目を選ぶ際にどのような基準で選んでいるかという大学生の授業選択態度の構造を把握し，その授業選択態度と成績との間にどのような関係があるかを検討することである。松田他（1999）と三宅（1999）から次のことが予想される。松田他（1999）においては，比較的下位の因子まで抽出していたため，授業選択態度は7因子構造となったが，実際にはより少ない因子数の構造となるであろう。それにともない，授業選択態度のタイプのクラスター数も少なくなり，選択基準を持たないタイプ，教官の人柄や授業内容を重視するタイプ，単位の取りやすさだけを重視するタイプなどに分類されるであろう。さらに，学生による自己評価と成績との関連を検討した研究（牧野，印刷中）から，授業中の積極的な学習態度と受講態度が成績に大きな影響を与えることが明らかとなっている。したがって，授業選択態度が直接成績に影響を与えるのではなく，授業選択態度が授業への参加あるいは授業中の学習態度に影響を与え，その結果成績に影響を与えと考えられる。したがって，授業選択態度は成績には直接的には影響を与えないと予想される。

方 法

対象授業と被調査者

国立大学のAクラスと私立大学のBクラスの2クラスを対象とし，その受講生を被調査者とした。対象とした授業は，いずれも選択科目であった。Aクラスにおいては，大学のすべての学部から学生が集まっていた。Bクラスにおいても各学科からの学生が受講して

いた。いずれの授業も主に1年生を対象とした選択科目であった。2つの授業の担当教員は同一人物であり同一の教科書を用いていた。いずれの授業も毎回、前半はテキストを用いて講義が行われ、後半は担当教員が作成した「コラム」が話された。Aクラスの授業日は平成12年度後期であった。登録者数は103名であったが、クラスサイズは、毎回60～80名程度であった。担当教員は、調査実施時点では教職歴10ヶ月であった。出席はとられていなかった。他方、Bクラスの授業日は平成13年度前期であった。登録者数は140名であったが、クラスサイズは、毎回70～80名程度であった。担当教員は、調査実施時点では教職歴1年3ヶ月であった。出席はカードリーダーにより管理されており、教員が点呼してとることはしなかった。

被調査者は四国地方の国立大学のAクラスと私立大学のBクラスを受講学生114名（A大学66名，B大学48名，男性71名，女性43名，平均年齢19.46歳，年齢幅18～27歳）であった。被調査者のうち，81名（71.1%）は1年生であった。

質問紙の構成と成績

一般的授業選択態度項目 大学生が授業に関するどのような情報を授業選択の際に重要視するかを調べる質問紙を次のような手順で作成した。松田他（1999），三宅（1999）などを参考にして，21項目の大学生の一般的な授業選択態度を測定する項目を抽出した（詳細は後述）。これらの項目に対して，「あなたが大学で授業を選択する際に重要となることについて伺います。あなたは，授業科目を選択するときに，以下のことをどの程度重要と考えますか？」の質問の後に「1．授業の内容が日常の問題と関連している」などの項目を配列した。これらの項目に対して，「まったく重要でない」～「非常に重要である」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど授業選択の際に，該当項目の内容を重要視することを示す。

成績 学生の成績は，講義の最終回あるいは中間期に行われた試験の得点と成績評価（優，良，可，不可）の2つを利用した。2つのクラスの試験はどちらも選択式試験であり，50点満点であった。また，成績評価は優，良，可，不可の4段階で行なわれた。成績評価の判断材料は，試験，小テスト，研究協力点（調査への協力）の合計が用いられた。

手続き

いずれの対象授業においても「大学生活に関するアンケート」という形式で実施した。

Aクラスでの調査は、平成13年1月23日授業の後半15分を用いて行った。また、Bクラスでの調査は、平成13年6月21日の授業の後半15分を用いて行なった。調査は隣の学生から回答が見えないように席を離し、個人のプライバシーに配慮した。

結 果

因子分析

一般的授業選択態度 一般的授業選択態度に関する21項目の評定値に対して因子分析を行った（Table 1）。固有値1を基準とする因子分析（主成分法，バリマックス回転）を行い，2因子以上に負荷の高い項目，因子負荷量が.400未満の項目を削除した。その結果，3因子構造と解釈された。第1因子は“試験が簡単である。”，“単位がとりやすい。”，“試験前にあまり勉強しなくてもよい。”など授業への負荷が小さいこと，単位が取りやすいことに関する項目に負荷が高かった。したがって，これらを「単位のとりやすさ」因子とした。そして，「単位のとりやすさ」を示す7項目（ $r = .81$ ）の平均を「単位のとりやすさ」得点として算出した（1～5点，得点が高いほど，単位をとりやすいことが授業選択の基準となる）。第2因子は“授業の内容がわかりやすい。”，“担当教官が質問に答えてくれる。”，“授業の内容が興味深い（おもしろい）。”など6項目に負荷が高かった。これらは，授業内容を総合的に評価していると捉えられたので「授業内容の良さ」因子と命名した。これら6項目（ $r = .75$ ）の平均を「授業内容の良さ」得点として算出した（1～5点，得点が高いほど，授業内容の良さが授業選択の基準となる）。第3因子は“授業の内容が将来役に立つ。”，“授業の内容が日常の問題と関連している。”など授業内容が実際にどのように役立つのかその有用性に関する項目に負荷が高かったため，「授業内容の有用性」因子とした。これら「授業内容の有用性」に関する3項目（ $r = .78$ ）の平均値を「授業内容の有用性」得点として算出した（1～5点，得点が高いほど，授業内容が役立つことが授業選択の基準となる）。いずれの因子の信頼性も非常に高い値であった。

一般的授業選択態度による大学生のタイプ分け

一般的授業選択態度の3因子の評定値を変量とした最長距離法によるクラスター分析を行ない、大学生を分類した。その結果、3つのクラスターを大学生の一般的授業選択態度の区分として用いることとした。第4以降のクラスターに関しては、その区分に分けられる大学生が10人以下と少なかったため、クラスターに分類しなかった。各クラスターの人数をTable 2に示す。クラスター群毎に一般的授業選択態度の因子の評定値を算出し、一元配置分散分析によって平均値の差を比較した結果、すべての因子において群の効果は有

Table 1 一般的授業選択態度項目に対する因子分析の結果

項 目	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
単位のとりやすさ				
10. 試験が簡単である。	.759	.246	-.397	.795
2. 休講が多い。	.744	-.100	.053	.566
14. 単位がとりやすい。	.743	.234	-.354	.733
21. 試験前にあまり勉強しなくてもよい。	.713	-.276	-.083	.592
16. 居眠りをすることができる。	.692	-.279	.039	.558
20. 担当教官がやさしい。	.583	-.189	.430	.560
11. 朝早い授業(1時限)や夕方の授業(5時限)ではない。	.457	.227	.124	.275
授業内容の良さ				
8. 授業の内容がわかりやすい。	-.014	.789	.126	.639
12. 成績評価の基準(単位認定の基準)がはっきりとしている。	.155	.653	-.134	.469
9. 黒板(あるいはホワイトボード)やOHPを用い、ノートがとりやすい。	.029	.632	.124	.416
15. 担当教官が質問に答えてくれる。	.047	.607	.292	.456
13. 授業の内容が興味深い(おもしろい)。	-.007	.565	.204	.360
5. 担当教官がユーモアがあっておもしろい人である。	.177	.451	.300	.325
授業内容の有用性				
3. 授業の内容が将来役に立つ。	-.062	.302	.800	.735
17. 授業の内容が自分の専門分野に関連している。	.097	.286	.713	.600
1. 授業の内容が日常の問題と関連している。	-.060	.344	.615	.500
残余項目				
7. 同じ学科の友人が受けている。	.393	.163	.123	.196
19. 試験だけで成績が決まる。	.296	-.058	.277	.168
4. 教科書がある。	-.118	.355	.162	.166
6. 受講生が、100人以下であり多くない。	-.106	.301	.034	.103
18. 出席をとらない。	.466	-.485	.048	.455

N = 114

意であった。クラスター群の因子の評定値の平均値，および分散分析と多重比較の結果を Table 2 に示す。この結果をもとに，各クラスター群の一般的授業選択態度の特徴をまとめると次のようになる。まず，第 1 クラスター群は，第 1 因子である「単位のとりやすさ」の評定値が特に高い。授業内容の良さは全体の平均よりもやや低く，授業内容の有用性は全体の平均と同じ程度である。授業への参加が楽であり，単位がとりやすいことを重要視する群である。12 名がこのクラスターに分類されている。第 2 クラスター群は，第 2 因子「授業内容の良さ」の評定値と第 3 因子「授業内容の有用性」の評定値がともに高い。一方，「単位のとりやすさ」の評定値が非常に低い。単位の取りやすさに魅力を感じず，授業内容のおもしろさや授業内容の有用性を基準に授業を選択する群といえる。この群には 46 名が分類された。第 3 クラスター群は，「単位のとりやすさ」因子においては，評定値が全体の平均と同程度であるが，他の因子はいずれも評定値が低めである。授業選択に関して，「このような授業を受けたい」という明確な基準を持っていない消極的な態度をもっている群ととらえられる。この群には 26 名が分類された。なお，以上 3 つのクラスターのいずれにも分類されなかった学生が 30 名みられた。

Table 2 クラスター群別にみた一般的授業選択態度の評定値

一般的 授業選択態度 ^{a)}	人数	因子 1	因子 2	因子 3
		単位のとりやすさ	授業内容の良さ	授業内容の有用性
全 体	114	3.14(0.74)	4.12(0.59)	3.89(0.89)
クラスター				
クラスター 1	12	4.13(0.45)	3.82(0.41)	3.94(1.02)
クラスター 2	46	2.87(0.57)	4.43(0.34)	4.44(0.35)
クラスター 3	26	3.18(0.58)	3.49(0.57)	3.20(0.88)
その他	30	3.14(0.83)	4.31(0.47)	3.59(0.89)
$F(2,81)^{b)}$		23.93 ^{**}	39.74 ^{**}	26.83 ^{**}
多重比較 ^{c)}		1 > 2, 3	2 > 1, 3	1, 2 > 3

a) 評定値は，1～5 の値を取りうる（3 が「どちらでもない」に相当）。評定値が大きいくほど，その因子の内容を重要視することを示す。括弧内は標準偏差。

b) 各因子得点に対して，クラスターを要因とする 1 要因 3 水準の分散分析を行なった結果を示す。

c) 数字はクラスターの番号を示す。

^{**}
 $p < .01$

一般的授業選択態度と成績との関係

一般的授業選択態度と授業の成績との間にどのような関係があるかを検討するために、成績の指標である試験得点に対してクラスターを要因とする 1 要因分散分析を行なった (Table 3)。その結果、有意な効果はみられなかった ($F(2,81) = 0.77$, *n.s.*)。つまり、一般的授業選択態度のタイプにより、試験の成績に違いはみられなかった。次に、一般的授業選択態度ともう 1 つの成績の指標である成績評価との関連を検討した。各クラスターにおいて、成績が優である学生の割合を求めた (Table 3)。その結果、各クラスターに占める成績優秀者の割合にも差はみられなかった。

考 察

本研究の目的は、大学生が選択科目を選ぶ際にどのような基準で選んでいるかという大学生の授業選択態度の構造を把握し、その授業選択態度と成績との間にどのような関係があるかを検討することであった。

大学生が普段、授業を選択する際にどのようなことを重要と考えているかを検討した。その結果、3 つの因子が抽出された。1 つ目の因子は、授業へ参加が楽であること、単位が取りやすいことを重要視するという「単位のとりやすさ」であった。この因子は、三宅 (1999) における「単位のとりやすさ」と同様の内容を示していると思われる。これは、

Table 3 クラスター群別にみた試験得点と成績優秀者の割合

一般的 授業選択態度	人数	試験得点 ^{a)}	成 績 ^{b)}
		50点満点	「優」取得者の割合
全 体	114	28.71(11.30)	30.7%
クラスター			
クラスター 1	12	25.50(11.52)	33.3%
クラスター 2	46	29.24(11.12)	30.4%
クラスター 3	26	30.50(11.89)	38.5%
その他	30	27.63(10.58)	23.3%
$F(2,81)^{c)}$		0.77	

^{a)} 得点は、0 ～ 50 の値を取りうる。値が大きいほど、高得点を示す。括弧内は標準偏差。

^{b)} 数値は、全体あるいはクラスターに占める成績が優の学生の比率を示す。

^{c)} 試験得点に対して、クラスターを要因とする 1 要因 3 水準の分散分析を行なった結果を示す。

大学生の多くがいかに楽をして単位を取るかを考えているかを反映していると思われる。第2因子は、「授業の内容がわかりやすい。」、「担当教官が質問に答えてくれる。」など授業内容を総合的に高く評価している因子であった。この「授業内容の良さ」は、三宅（1999）における「授業内容の良さ」と同様であった。第3因子は、授業の内容が将来役に立つことを重要と考える「授業内容の有用性」であった。これら「授業内容の有用性」の項目は、三宅（1999）においては「授業内容の良さ」の因子中に含まれていたが、本研究では、独立した因子として現れた。これは、大学生が授業で学んだことが将来どのように役立つのかを重要視していること、また、その有用性が授業選択の大きな基準となることを示唆している。本研究では以上の3因子が抽出されたが、三宅（1999）においてはこの他に「授業のもつ負荷の大きさ」、「真面目の有利さ」、「教官の人柄の良さ」、「受講生の多さ」、「授業での個性の発揮しやすさ」の因子が得られている。この中で、「授業のもつ負荷の大きさ」は、「単位のとりやすさ」とほぼ逆の内容を示している。また、「教官の人柄の良さ」は本研究では「授業内容の良さ」に含まれていた。「真面目の有利さ」と「受講生の多さ」は予想したとおり、因子として独立しなかった。「授業での個性の発揮しやすさ」については、項目を増やし検討していく必要があるだろう。

次に、3つの因子の得点をもとに大学生の一般的授業態度を分類したところ、以下の3つのタイプが見いだされた。まず、1つ目のタイプは「単位の取りやすさ重視」タイプであった。このタイプの学生は、「試験前に勉強しなければならない」、「試験が難しい」などの単位取得に負荷の高い授業をさけ、単位の取りやすい授業を好むという典型的な「楽勝科目」選択を示していた。2つ目のタイプは、「授業内容の良さ・有用性重視」タイプであった。このタイプは、授業内容のおもしろさ、わかりやすさ、担当教官のパーソナリティを重要と考え、さらに、授業内容が将来役に立つことなどを重視していた。このタイプの学生は、「単位取得の容易さ」をあまり重視しないという点で1つ目のタイプと異なっていた。3番目のタイプは、「消極的授業選択」タイプであった。このタイプの学生は、積極的な授業選択態度を持たず、「単位取得の容易さ」も「授業内容の良さ」、「授業内容の有用性」も授業選択の際に特に重要と考えていなかった。

以上のように、本研究では、一般的な授業選択態度に3つのタイプが見いだされた。それらは、単位の取りやすさを重視する「単位の取りやすさ重視」タイプ、授業内容を第一に考える「授業内容の良さ・有用性重視」タイプ、授業選択の積極的な基準をもたない「消極的授業選択」タイプであった。この3つのタイプは、それぞれ三宅（1999）におけ

る第5クラスター、第3クラスター、第1クラスターに対応していた。三宅（1999）においては、このほかに、没个性的な多人数の授業を嫌い、個性を生かした主体的な授業を好むタイプと全体的にどの授業についても積極的に選択しようとするタイプが見られた。前者に関しては、個性を生かした授業を好むという個性の発揮しやすさを示す因子が抽出されなかったために、本研究では見られなかったと思われる。また、後者に属する学生もいたが非常に人数が少なかった。被調査者を増やし検討する必要がある。

さらに、一般的授業選択態度のタイプと授業の成績との関係を検討した結果、試験の得点に関しては、授業選択態度のタイプによる差はみられなかった。つまり、どのような基準で授業を選ぶかという一般的授業選択態度のタイプにより、試験の結果は異ならなかった。また、一般的授業選択態度のタイプと成績評価との関係を検討した結果、「優」を取得した学生に比率においても、差がみられなかった。つまり、一般的な授業選択態度により成績評価に違いはみられなかった。これらの結果は三宅（1999）を支持しない結果である。このような結果の理由として、一般的な授業選択態度と実際に受講した結果の試験成績、成績との間には関連がないことが考えられる。しかしながら、本研究での「単位の取りやすさ重視」タイプの学生は12名と少数であるので再検討する必要がある。

最後に、本研究の今後の課題として、以下の点があげられる。まず、本研究では、大学生の一般的な授業選択態度について考察した。その一方で、大学生は専門課程に入ると各学部学科特有の特定科目の履修を行なう。このような専門科目の選択においては、今回の授業選択態度とは異なる態度をもつ可能性がある。例えば、本研究で対象とした教養科目においては「単位の取りやすさ」因子が顕著となったが、専門科目に対しては「授業の内容」を重視することが予想される。2番目に、一般的授業選択態度、授業中の学習態度と成績との関連を検討する必要がある。本研究において、一般的授業選択態度と成績の間に関連はみられなかった。しかしながら、授業を選ぶ基準、つまり、どのようなことを重要視しているかという基準は、その授業への参加意志、授業中の学習態度に影響を与え、その学習態度が成績に影響を与えることが十分予想される。つまり、自分の選択の基準に見合う授業においては、積極的に学習が行なわれると推測できる。最後に、被調査者の増大である。本研究では、その人数が114名と比較的少数であった。したがって、本研究の結果を一般化するのには問題が残る。より多くの学生を対象として、研究を行う必要がある。

引用文献

- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察 大学の授業評価に関する実証的研究(8)
福岡教育大学紀要, 42, 277 - 291.
- 刈谷剛彦 1995 キャンパスは変わる 玉川大学出版部
- 牧野幸志 2001a 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 教養選択科目
「社会心理学」の場合 高松大学紀要, 35, 1 - 16.
- 牧野幸志 2001b 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 専門必修科目
「人間関係論」の場合 高松大学紀要, 35, 17 - 31.
- 牧野幸志 2001c 学生による授業評価の規定因の検討(1) 多変量解析を用いた因果モデルの検討
高松大学紀要, 36, 印刷中.
- 松田文子・三宅幹子・谷村 亮・小嶋佳子 1999 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度,
及び成績の関係 教職必修科目「生徒指導論」の場合 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 121 - 130.
- 三宅幹子 1999 大学生における授業選択態度のタイプと授業評価, 自己評価, 及び成績の関係
広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 141 - 148.
- 水野邦夫 1998 大学生の受講態度に及ぼす諸特性の影響について 日本心理学会第62回発表論文
集 375.
- 水野邦夫 1999 大学生の受講態度に及ぼす諸特性の影響について(2) 日本心理学会第63回発表論
文集 1025.
- 豊田秀樹 1999 学力崩壊 PHP研究所

高 松 大 学 紀 要

第 36 号

平成13年 9 月25日 印刷

平成13年 9 月28日 発行

編集発行

高 松 大 学
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064